

第2分科会

テーマ「地域と一体となった体験活動を通しての道德教育」

提 案 者	庄原市立総領中学校
司 会 者	庄原市立西城中学校
記 録 者	庄原市立比和中学校
指導助言者	東部教育事務所教育指導課

1 はじめに

庄原市は、広島県北東部に位置し豊かな自然に囲まれている人口約 36,500 人の少子高齢化と過疎化が同時進行している自治体である。総領町は、庄原市の南端に位置している人口約 1,400 人の田総川流域の谷合にある町である。

本校は生徒数 39 名の小規模校である。生徒は物事に真面目に取り組むことができるが、切磋琢磨する力や主体的に物事にチャレンジする力が弱い。

そこで道德教育において、平成 28 年度に総領中学校区（総領小学校、総領中学校）として文部科学省委託『道德教育改善・充実』総合対策事業【メニュー 3】（以下、【メニュー 3】とする。）の指定を受け、地域と一体となった体験活動を通しての道德教育に取り組んだ。その折、本校では、【メニュー 3】の指定を契機に、道德の時間の名称を道德科とした。今年度は、総領中学校区として【メニュー 3】の指定を受けてはいないが、本校は継続して安田女子大学教授の竹田敏彦先生の指導により道德教育の充実に取り組んでいる。

併せて、本校は平成 28 年度から 2 年間、「学びの変革」パイロット校事業実践指定校として実践研究にも取り組んでいる。

2 研究のねらい

昨年度、総領中学校区として【メニュー 3】の指定を受け、「家庭や地域と一体となった体験活動を行う中で、児童生徒の自尊感情を高め、社会参加の意欲や態度を豊かに育てることにより、生徒指導上の諸問題の未然防止を図る」ことを研究のねらいとした。今年度も本校では、昨年度の研究のねらいを引き継ぎ道德教育の実践を行っている。

平成 28 年度の【メニュー 3】の研究主題は、総領中学校区で統一して「人とのかかわりの中で、自ら考え、判断・表現し、学び合う生徒の育成」とした。本校はこの研究主題の副題に～思考を深める「問い」の設定を通して～を設定し、研究の焦点化を図り、本年度も継続して取り組んでいる。

3 研究の内容

昨年度、【メニュー 3】の指定を受け、総領中学校区地域推進協議会（以下、地域推進協議会とする。）が設置された。そこで設定された「かかわり つながり 高め合う」の『地域まるごと宣言』を町内全体に発信し、地域で子供を育てる機運を盛り上げた。そして、地域推進協議会が中心となり、地域と一体となり達成感や自己の成長を実感し、自尊感情や社会参加の意欲が高まる体験活動に取り組んだ。

道德教育の要である道德科においては、地域と一体になった体験活動及び各教科等と有機的に関連

させた「総合単元的な道徳学習」に取り組んだ。

また、「考え、議論する道徳」になるよう、思考を深める「問い」を設定して、生徒の発言から道徳性の発達段階を本校独自の方法で見取り、道徳的価値の自覚を深めていく授業づくりを行った。

4 研究の実態

(1) 総領自治振興区の地域教育コーディネーターとの連携

地域と一体となった体験活動をするためには、学校と地域がつながることが重要である。そこで、地域推進協議会では、総領自治振興区の地域教育コーディネーターに、様々な団体との連携役を担っていただいた。地域教育コーディネーターは地域の情報や地域の人材にも詳しく、児童生徒の日頃の様子もよく把握されおり、学校と地域が一体となり体験活動を推進する上で、中核となる存在である。

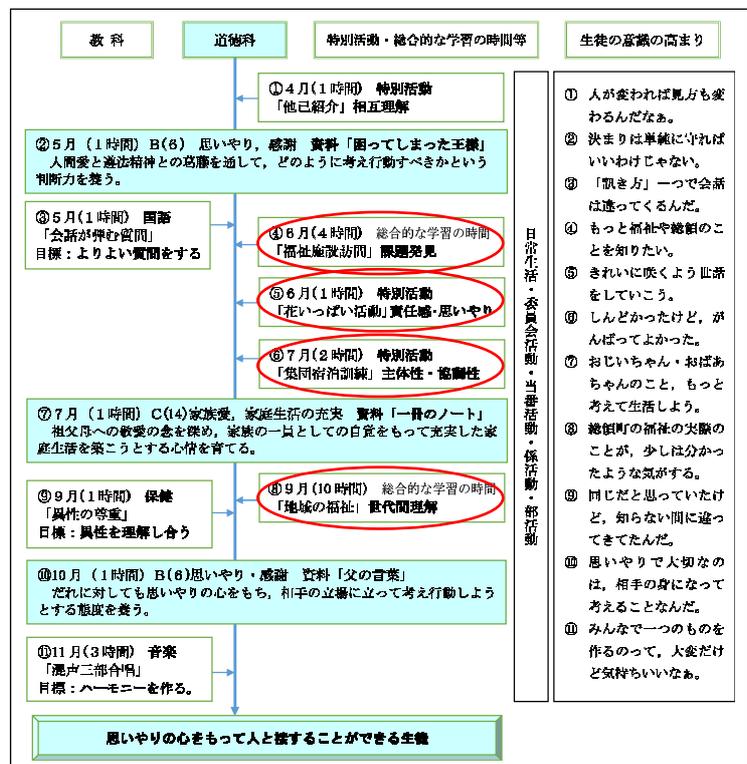


一例として、昨年の10月、道徳科に地域教育コーディネーターを招聘して学習したことが契機となり、節分草祭(3月に総領町を挙げて開催される祭)に2学年が参画することになった。2年生の生徒会執行部が、夜に開催される里山を楽しむ町イベント実行委員会に参加し、その協議内容をクラスに持ち帰り、自分たちで祭に貢献できることを考えた。そして、一つのブースを自分たちのアイデアで責任をもって企画・運営する取組を行った。このことは、今年度も総合的な学習の時間の年間計画に位置づけて計画的に取組を進めている。

おもな学習・体験活動	連携した団体
地域包括ケアと地域福祉	総領診療所
紙すき体験	総領町紙すき研究会
プレイバックシアター	県立広島大学
とうろう菓子づくり体験	稲草西自治会老人部
高齢者疑似体験	社会福祉協議会総領地域センター
節分草ガイド	節分草保存会
祭ブースの企画・運営	里山を楽しむ町イベント実行委員会

(2) 「総合単元的な道徳学習」の取組

【メニュー3】での道徳科の重点内容項目は、B(6)「思いやり、感謝」とC(16)「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」の二つに設定した。1学年と3学年でB(6)「思いやり、感謝」、2学年でC(16)「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」を取り上げた。この重点内容項目について、道徳科を要として体験活動や各教科等に関連させるために、「総合単元的な道徳学習」に取り組んだ。これまでも道徳科と体験活動や各教科等に関連させて道徳性を高めていこうとする取組はあった。しかし、具体的に何がどう関連し影響し合うかは明確にならなかった。そこで「総合単元的な道徳学習」の構想図を作成し、道徳科と体験



1 学年の総合単元的な道徳学習の構想図

※  は地域連携により実施したものと

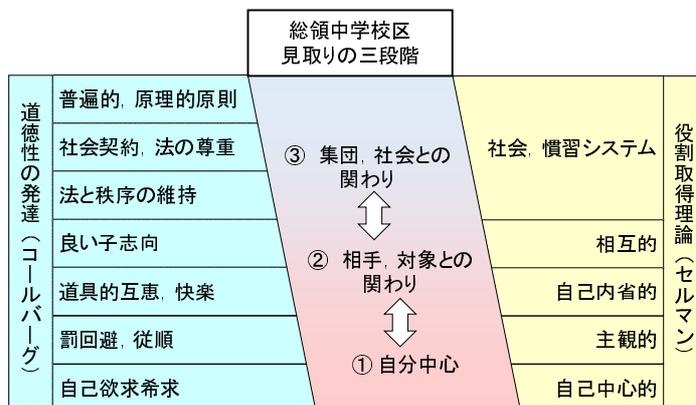
活動や各教科等の関連を視覚的に分かりやすく配置した。中央に道徳科，左に教科，右に体験活動等を配置し，それぞれの学習がどのように教科横断的に道徳科と関連するかを示した。さらに各学習において目指す生徒の姿を生徒の意識の高まりとして表し授業者で共有した。また，従前から地域と共に取り組んできた伝統・文化的な体験活動と道徳科との関連が，総合単元的な道徳学習の構想図の作成を通してより明らかになった。

(3) 「考え，議論する道徳」の授業づくり

ア 問いの工夫とその見取り

道徳科の授業では，特に「問い」を工夫することに取り組み，「問い」に対する生徒の反応を事前に予想することに重点を置いた。「問い」は，まず最も心が揺さぶられる場面に焦点を当てて中心発問を設定し，基本発問・補助発問を設定していくことで構成した。その際，生徒が広い視野から多面的・多角的に考え自己決定していくような「問い」を用意するようにした。そして，生徒の判断理由に道徳的価値を見取り，生徒の発言に補助発問を行うことで，発言の中にある矛盾を自覚させたり，生徒の意見を明確に言語化させるように取り組んだ。実際の授業場面でその「問い」や補助発問が有効であるかなどを検討するために，模擬授業を実施して互いに指摘し合っ吟味し，これらの練り直しを行った。

道徳性の発達段階は，当初はコールバーグの道徳性発達理論を基に行っていたが，研究と実践を進める中で，ケアの倫理の観点も加味し且つより簡潔に児童生徒の道徳性を授業の中で見取るために，生徒の反応を「自分中心」「相手・対象との関わり」「集団・社会との関わり」の三段階で見取るようにした。これを「総領中学校区見取りの三段階」と位置づけ，事前に生徒の発言をこの三段階で予想して指導案を考えた。



そして，実際の授業場面では「総領中学校区見取りの三段階」を用いて，T1 と T2 間の連携や生徒の発言の見取りに生かした。

イ 話し合いの工夫

これまでの道徳科においては，授業者対生徒の一問一答で授業がすすむことが多く，生徒の思考の広がりや深まりが不十分であった。そこで特に中心発問に対する自分の意見を考える際に，ペアトーク・グループトークの場を設け，生徒同士の集団思考を行うようにした。個人思考で自分の考えを明確にして集団思考に移ることにより，個々の意見が活発に交流できるようにした。

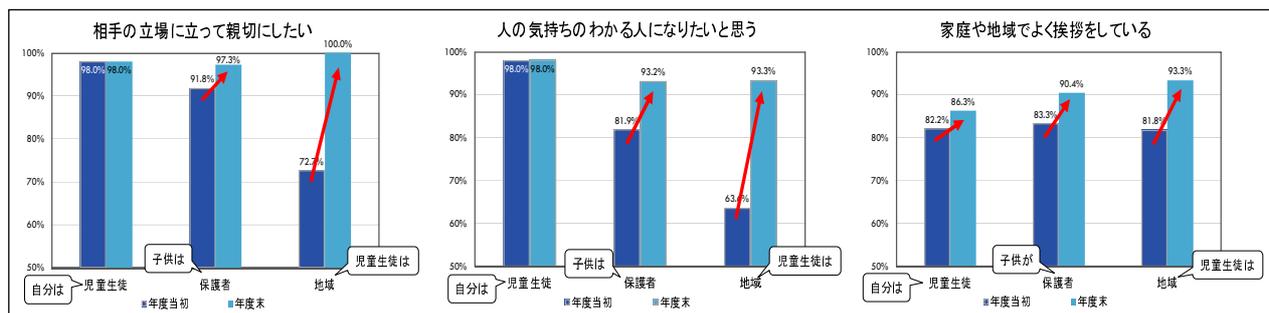
【生徒の記述の三段階による見取りの例】

段階	生徒の記述
①	今まで自分は参加するだけで，地域の祭りのために何もしていなかったことに気付いた。
②	剛は，自分たちの力で祭りを作り上げることの楽しさを知っていて，達成感を味わっているなど思った。
③	剛たちみたいに，自分も地域の祭りを開催させるために何かできるのではないかと気付いた。

授業者は，机間指導の際に「総領中学校区見取りの三段階」に照らし合わせて，生徒の考えをプリントや話し合いの内容から把握して，全体交流での意図的指名につなげた。意図的指名では，道徳性の発達段階の低い意見から高い意見の順に指名し，生徒が自分の意見と他の生徒の意見を比較しやすくなるよう工夫した。

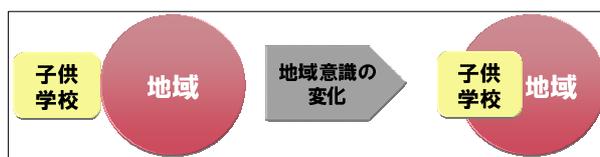
5 成果と課題

(1) 成果

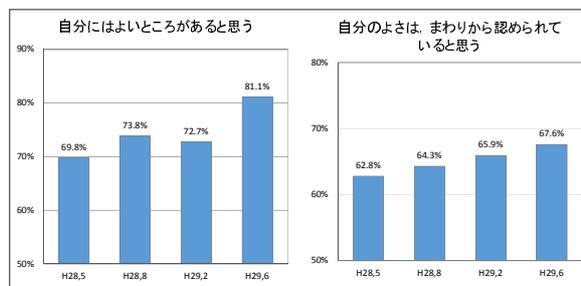


質問紙調査における肯定的評価の変容①

- 多くの保護者・地域の方は、生徒の活動の姿や交流を通して肯定的評価に変わった。そして、地域教育コーディネーターを介して、学校が計画的に体験活動に参加することで、保護者・地域の方の連携が円滑になり、一体感が深まった。
- 「総合単元的な道徳学習」の構想図を作ることにより、道徳教育と体験活動や各教科等の相互の関連が明確になり、教師間の連携も円滑になった。
- 模擬授業を通して組織的に思考を深める「問い」や補助発問を練り直したことにより、その精度が高まった。
- 生徒の発言を「総領中学校区見取りの三段階」に照らして事前に予想し、授業の中で見取り、意図的指名を行ったことにより、生徒が自分の意見と他の人の意見を比較しやすくなり、道徳的価値に気づきやすくなった。



- 生徒の自尊感情に対する肯定的評価の割合が上昇した。計画的に多くの地域活動に参加して保護者・地域の方と温かい交流を行ったことや、生徒同士の話し合い活動の充実を図ったこと等が要因として考えられる。
- 暴力行為、いじめや不登校生徒の認知件数は、少ない状態で維持できている。地域と一体となった体験活動を通しての道徳教育の取組により、生徒は思いやりや郷土を愛する心情が高まり、生徒指導上の諸問題の未然防止につながっている。



質問紙調査における肯定的評価の変容②

(2) 課題と今後に向けて

- 「総合単元的な道徳学習」をつくるためには、小中が連携して9年間を見通した体験活動を行い、教科等との関連を一層明確にしていく必要がある。
- 「考え、議論する道徳」になるよう、模擬授業等を通して、思考を深める「問い」や話し合い活動の在り方を組織的に協議する場を充実させる必要がある。
- 地域教育コーディネーターを中核とする地域との連携をさらに深め、学校と保護者・地域の方が交流を密にし、協力しながら道徳教育を今後も進めていきたい。